

グローバルゼーションについて



北陸先端科学技術大学院大学特別学長顧問・教授

牧 島 亮 男

Akio Makishima

プロ野球では、外国出身選手の数は多くなり、また米国で活躍する日本人選手の数も増加している。以前ドジャーススタジアムで野茂選手が投手としてでた試合を観戦したことがあり、当時と比較すると隔世の感がある。

企業では、その経済活動として、世界中に、支社、工場、子会社、連携会社などが出来て、いわゆる企業戦士として派遣され、多くの社員が現地での日常生活を体験して、国際化を学び、日本との違いを実感し、また日本そのものを再確認している。このような人々はますます増加している。

大学、学会もグローバル化は急速に進んでいる。文部科学省の留学生 30 万人計画、世界的研究拠点の大学 G C O E (Global Center of Excellence) 形成の推進などに象徴されるように国際化が必須となってきた。米国セラミックス協会は、その中に、G F T (Globalization Task Force) 委員会を立ち上げた。背景として米国としては、国内だけではなく、世界各国の動きに注視してセラミックス協会を運営しなければならないとの反省とグローバル化への意気込みでもある。世界中の種々のセラミックス、ガラス関係の組織の国際活動について情報交換を行い、米国セラミックス協会の活動のグローバル化の参考にすると同時に、国際セラミックス連盟 (I C F, International Ceramic Federation, <http://www.ceramic.or.jp/icf/>) の再活性化を模索するものでもある。私は、この委員会に数年間関与することになり、主に、日本セラミックス協会やアジア・オセアニアセラミックス連盟 A O C F (Asia-Oceania Ceramic Federation) の国際活動を紹介して、種々の国際会議や国際交流について委員活動をした。I C F (本部：米国オハイオ州) は、1990 年に欧米と日本のセラミックス学会によって設立され、現在米国セラミックス協会、ヨーロッパセラミックス協会、日本セラミックス協会、中国セラミックス協会など約 40 の世界主要セラミックス団体が加盟している。ガラス、セメント、電子セラミックス等の多数

存在する協会、産業団体を総合した連盟で①国際会議の開催、2010年には第3回国際セラミックス会議（ICC）を大阪で開催予定、②セラミックス材料の検査基準作り、③セラミックスの教育、④セラミックス材料の開発ロードマップ作成、⑤種々のセラミックス分野で開催される国際的な会議、シンポジウムの開催日程調整などの様々な活動を実施している。たまたまであるが、私はこのICFの会長を昨年7月から務めており、各国の委員と毎日のように情報交換をしながら、運営にあたっている。また、ICGの運営委員会（Steering Committee）や技術委員会（Technical Committee）には長年関わってきた。

これらの経験からして、グローバル化を長期間継続的且つ友好的に進めるのは、結局、個々の構成員の努力が必要である。また、夫婦での集会参加も珍しくはなく、個人的に信頼関係の涵養や国際交流を積極的に普段から地道に行うことも心がけるべきであろう。英語や各国の言葉に興味を持ち、コミュニケーション力を普段から養うことは無論重要である。ヨーロッパで委員会が開催される時など、昼食時に私が入ると、ドイツ語で話していた会話を自然に英語にスイッチしてくれる。ヨーロッパの委員たちや学生など総じて英語によるコミュニケーション力は以前と比べ向上している。会話の中心となる各国の文化活動への興味を持つことも重要である。また、日本の教育、経済、歴史、習慣、食事などを的確に英語で説明できることも必要になってくる。グローバル化は個人のグローバル化でもある。